

送り火

神山暁美

六日 九日 十五日 と

忘れてはいけない日が三日もある八月

なのに 海も 山も 町も

昼も夜も 遺された者たちの泰平のざわめき

風化させてはならない：と

語り継がねばならない：と

生きぬいた老体にその時の声を強いる人びと
戦争を知らない耳にどれほどがつつたわるのか

戦場にいてすべてをその眼に映した父が

戦闘の記憶を自らの口から語ることはない

戦友との想い出話には笑みさえうかべて

戦地で食した南洋の高価な果物を恋しがる

私はそんな父を好きにはなれなかった

夜空に咲き乱れる火の花 ひびきわたる歓声

川面に裾を曳き逝く 流し灯籠のあかり

にぎわう月おくれの盂蘭盆会

人間魚雷「回天」を搭載したまま

日本海で敗戦の報を受けた父の駆逐艦は

いまも 福島県小名浜の港の先で

防波堤となつて国を護っている

過去を洩らす戦傷の痕をこらえながら
しずかに送り火を見据えるうしろ姿

昭和二十年のこの日も

山は文字を描いて燃えていたのだろうか